JAPAN HONG KONG

飛龍 FLYING DRAGON

日本香港協会ニュース ……No.65

「貧」変じて「富」に化す香港の妙

泥のベールを割って姿を現した乞食ならぬ富者

今時“たまには乞食(こじき)鶏でも食べるか”などと宣(のたま)えば、“えっ！何だって？”“そんなもの聞いたことがないなあ”との反応が大多数であったとしても不思議はありません。

その昔、九龍側のネイサン道(Nathan Road)から直交しているオースチン道(Austin Road)へ折れた一寸先に、確か「天香楼」と称する杭州料理屋があった。香港には、中国各地の名を掲げる料理屋(北京・上海・四川・広州・潮州など)はそれぞれ数多あったが、杭州料理は私の知る限り、そこを措いては耳にしたことがない。杭州は、中国有数の風光明媚な土地として広く内外に知れ渡っているが、料理は特筆すべきものが数少ないせいだろうか。但し、さる中国料理の解説書には「毛沢東の愛好した杭州料理」の見出しがある。

いずれにしても、場所柄も大通りから引っ込んでいるし、建物も古びており客を魅惑するものは何一つなかったが、そこで、生まれて始めてこの料理の饗応にあずかった。味もさることながら、その手法が珍しいのでいたく感銘を受けたことを覚えている。勿論、その原型は、調理器具を持たない乞食が、盗んだ鶏を泥で包んで焚き火で蒸し焼きにしたとの伝説どおり、極めて素朴なものであったに違いない。現在のものは、杭州の老舗「楼外楼」が時代を経て工夫を加え洗練したものとされる。正式な名称は、「乞食」は現代中国語ではないので、「教(叫)化鶏」または「杭州煨鶏」である。

ところがである、近年何処へ行ってもその本来の「教化鶏」なる名称を、メニューの中で見かけることはなくなってしまった。一体どうしたのだろうか？なんとなんと、何時の間にやら出世して「富貴鶏」に化けてしまったのだ。香港人も経済が発達し生活水準が向上するにつれ、貧乏くささを嫌い耳に快い表現に変えてしまったようである。範疇は異なるが、地名の変遷にも似たような例が見られる。MTR(地下鉄)観塘線に「楽富」という駅がある。最初、そんな地名があったかなあと首を傾げたが、その後昔の「老虎」をニュータウンの開発に合わせて、縁起の良い名前に変えたことを知った。つらつら考えてみるに、今を時めく香港どころか世界の長者番付の常連となった「李嘉誠」にしても、その昔は一個何銭のプラスチック造花をコツコツ作る零細企業から身を興し、一代にしてその財を成したのだ。左様に、機を見るに敏なる人材がおれば、それに応ずる自由なビジネス環境を提供したことこそ、香港の絶えざる経済成長を支える活力の秘密ではなかろうか。

NPO日本香港協会会員　塚本勝弘

目　次

2010年８月 発行

「貧」変じて「富」に化す香港の妙 …… 1
中国企業との合弁設立交渉が語る中国ビジネスの現実 …… 2
ー「香港返還」の過程と「中国改革開放」の先がけのはざまで- …… 3
座談会：香港リトルリーグの移り変わり …… 4～5
香港貿易発展局からのお知らせ …… 6
全国連合会・各地協会便り
連合会：全国連合会からのお知らせ …… 7
東　京：特定非営利活動法人日本香港協会
新理事長 原田光夫氏インタビュー …… 8
関　西：華人経済研究部主催セミナー/文化講演会 …… 9
中　京：2010年イベント紹介あれこれ …… 10
九　州：平成22年度第１回通常総会・講演会開催 …… 11
山　形：『日本企業と中国企業で働いて思ったこと』 …… 12
北海道：～日本のデザイン産業を香港・中国ビジネスへ～
「デザイン産業セミナーin札幌」を開催しました …… 13
宮　城：2010年度通常総会、記念セミナー、そして懇親会を開催しました
春の「お花見会」を開催しました/「デザイン産業セミナーin仙台」を後援しました …… 14
沖　縄：オリオンビールが香港へ本格輸出/那覇ハーリー香港ドラゴンボートレースに参加
サーカー氏 香港パワーリフティング大会で優勝！ …… 15
インターコンチネンタルからのお知らせ …… 16

中国企業との合弁設立交渉が語る中国ビジネスの現実

NPO法人日本香港協会　理事　藤原　弘

筆者はこのたび優秀なストロボ技術を有する日本の中小企業と中国の寧波市の中国企業との合弁設立の支援を経験することができた。現在進行中の案件で今後の進展は未だ不透明であるが、当案件を通して考える日中間のビジネスについてお話をさせていただく。

・友好とは関係ない中国ビジネス

中国企業との合弁により、日本の不況から脱し、あらたなビジネスチャンスをつかもうとしている企業はプロスタジオ向け各種ストロボの製造販売をやっている企業であるが、今回はこれまで一部製品を委託生産していた寧波の中国企業との合弁を進め、中国市場への参入を目指すというものである。出資比率は日本側２７％、中国側７３％となっているが、日本側はストロボ関連技術と自社株を２０００株提供する。株式を提供する背景は海外展開を目指す中国企業の条件に合致したものであろう。いずれにしても、日本側は少数株主であり、合弁会社の経営権は握れない。日本側の合弁会社に対する義務は技術、機械設備、材料の購入、技術者の指導、育成等があげられている。

この日中企業による合弁設立に向けての動きは、ある日本の地方都市と浙江省余姚市との友好関係を通じて芽生えたものであるが、ビジネスの現場は友好関係とはまったく関係のない厳しいものであった。

まず問題となったのは、中国側は日本側の技術移転経費４００万元を日本側の口座に送金することになっていたが、４００万元を送金すると６６万元の税金がかかることから日本側企業の上海事務所の口座に振り込むことを主張した。日本企業の上海事務所は正式な販売会社ではなく、会社の口座もないので、実態的には振込みはできず、日本側企業の本社の口座にも振り込めない状況である。

次に中国側が仮契約の調印のあとで強く主張したことは、仮技術移転契約書では、日本側の義務として、「技術移転のために必要な、技術の研究報告、設計、計算、製品図面、製造技術、品質管理等を提供する」と合弁会社が必要とするすべての技術の提供を要求してきたことである。さすがにこれに対しては、日本語、英語そして中国語を交えて強く反対し、撤回させ、合弁会社が必要とする技術の提供は日本側が判断するということで落ち着いた。

・同床異夢の基本経営戦略

さらに問題となったのは、中国側の総経理が合弁会社での製品開発、販売戦略が決まっていないのに、「この合弁会社は設立後１年以内に収益をあげる」と断言したことも交渉をややこしくした原因である。筆者は直接の当事者ではなかったが、１年で収益をあげるという点を中国側の責任として、契約書、覚書等何らかの形で文章化すべきだと主張したところ、２年にしてほしいとのやや後退した回答が返ってきた。しかし、ここで問題となったのは中国側の総経理の大言壮語ではなく、日中双方で合弁会社においてどのような製品を開発し、どのような販売ルートでどのような顧客を狙うべきか明確な考えが明示されていないことであった。日本側は中国側の販路、市政府との関係を活用して中国の病院、保健所、大学医学部等への売込みを考えていたが、中国側は中国国内の販売では価格も安く、代金回収等の問題もあるため、日本市場を除く欧米市場で販売を打ち出したことである。合弁会社の必要な技術はすべて提供することを要求した背景には、このような販売戦略の違いがある。

・合弁会社の経営管理をどうするか

日本側は基本的に中国企業の経営状況はいいと判断しているものの、それを実証する公認会計士が審査した会計簿の提出を何度か求めたが、中国側の総経理から不動産、ホテル、レストラン等を多角的に経営していることから帳簿の提出は拒否された。これも日本では考えられない中国ビジネスの現実である。

しかし、筆者が見せてもらった中国企業の工場の印象を言えば、品質管理、人材訓練はしっかりと行っており、極めて優秀な中国企業とのイメージが強い。特に技術者、経営スタッフのきびきびきびした動きには感心させられた。帳簿の提出はこのような良好な経営環境を実証することになると思ったが、これは日本人である筆者の甘い見方であろう。

さらに今回は市政府の関係者とも何度か会い、工場用地の借地料、電気代、ガス代、水道代、法人税等を３年間無料とするという申し出があったが、それを文章化してほしいというと、「合弁設立申請書を早く提出すれば、その認可書を出すときに、これらの優遇政策をそこに書き込む」とのことであった。この市政府の提供する優遇政策も合弁会社設立時までは確定的なことは何もいえないのが実態だ。筆者が華南に進出している企業関係者に調査したところ、市政府の優遇政策も担当していた市政府のトップ経営者が何らかの理由でいなくなると、それを廃止され過去享受した優遇政策の経済的メリットの返還を要求されたことがあったとのことであった。中国側企業は市政府との関係も密であるが、優遇政策を確実に受ける段階までには相当時間がかかりそうだ。

・今回の教訓は？

今回の合弁設立にむけて中国企業との交渉のなかで感じたことは、１）日本側のポイント、立場は中国語でも、英語でも、日本語でもとにかく機会があるかぎり幾度でも強調し、確認する。２）仮契約などに調印しても、中国側は自社の事情変更により、仮に仮契約を調印してもそれほど拘束力はないことを認識すべきである。３）市政府関係者とも優遇政策の関係で何度も食事を共にしたが、優遇政策が現実のものとなるには相当時間がかかることを認識すべきである。４）中国人材の少ない日本の中小企業にとり、香港人等の華人の人材活用も検討する必要がある。

事実、今回の中国側企業は華南進出日系企業で働く、日本語も英語も流暢で日本式経営に精通した香港人総経理を１２０万香港ドルで雇用する計画を建てており、日本企業との合弁設立に向け着実に準備を進めていたことを報告しておきたい。

筆者はこの合弁交渉に入る前に、華南進出日系企業の関係者に、今回のような日本側が少数株主の立場で合弁を設立することについてコメントを求めたところ、すべての関係者が技術だけをとられるからやめたほうがいいとの回答であった。

このような状況を打破し、中国企業の資金力と日本企業の技術力を組み合わせて中国ビジネスを成功させる秘訣は何か。今回はこの日本の中小企業の共通問題である人材不足に対する解決策―華人の人材活用が大きく浮上しそうだ。

この日中企業の交渉の場に身をおき、双方がみせた対応を紹介することにより、中国ビジネスの現実を知るうえでいささかなりとも参考になれば幸いである。

藤原氏の近著「世界同時不況下での生き残りをかけて」（共著、リブロ社刊）が好評販売中です。

香港 いま・むかし

―「香港返還」の過程と「中国改革開放」の先がけのはざまで―

日本香港協会会員／中国進出企業経営研究会　井関　稔

香港は「返還」と「改革開放」という政治経済の波に大きく揺さぶられました、その時期の市民の心情や町の様子を香港事情見聞録にしました。

観塘工場街の雑踏と労働争議

九龍・観塘開源道の工場街
（1979年4月・筆者撮影）

赴任は１９７９年４月、私が降り立ったのは九龍城区の啓徳空港、海岸に沿って観塘港まで伸びた滑走路、ライオンロック側は古い乱立したビル、おまけに航空機の進路には山がそびえパイロット泣かせ、だが「キャセイのパイロットは軍人上がりで腕は確かだ」と云われた。観塘は埋立地の工場街、染料や焼けた樹脂の異臭が漂い、ビルの防犯用鉄製窓枠には毛皮を巻いたように繊維くずが付着していた。１階（グラウンドフロア）は貨物の積卸しでローリィ（トラック）が頻繁に出入りしごった返していた。今ではこうした騒騒しさは消え、ビル内にはオフィス、婦人服や靴などのお店などが軒を並べ、廊下も装飾されていたが、ビルの外壁は依然として薄汚れていた。

インフレが続き、１９８０年頃方々の工場ワーカーが賃上げを要求して、サボタージュが発生、当社にも波及した。労働組合もなく、同調者７人と観塘・労工処会議室で労使交渉をしたが、彼等には辞めて貰った。当社はその後、珠江デルタに生産拠点を移し、現在香港オフィスはスタッフのみの１２名である。

日本企業の進出と撤退

フリーポート・香港では日本の電気、機械製品の評価が高く、多くの日本企業が香港に販売、生産目的で拠点を構えた。ビクトリアハーバーのイルミネーションは、日系企業の広告が多く「ここは日本か」と勘違いする位だった。この２月「ザ・ペニンシュラ」からのハーバービューは、空港が移転して、イルミネーションは躍動感が高まり華麗さが増した。しかしふえた広告は日系以外、日系デパートは事実上撤退とのこと、日系企業の存在感が薄くなった。私見だが、日系企業は「ハード」つまり商品の優秀さに頼り過ぎ、「ソフト」面の意志決定、情報収集などもう一歩の観がある。

返還交渉：香港ドルの暴落と外国永住権

忘れもしない「黒い土曜日１９８３年９月２３日」、香港人Ｍさんの電話で起こされた「香港ドルを直ぐ米ドルにしろ」。この日香港中のスーパーではお米や食用油などの日用品が買いだめされ、商品棚は空っぽになった。その後政庁は通貨安定策で、香港ドルを「米ドルペッグ制」とした。当年度日系企業の多くは赤字決算だった。この前後から、香港人は外国永住権の獲得に向かった。当社フラットのオーナーは当社にフラットを売りオーストラリアに土地を購入、当社マネージャーは株式を売り豪・シドニー市にビルを買って今は上海で道路舗装会社を経営、当社運転手は深圳に戸建て住宅を買った。この頃の市民の気持ちはテレサ・テンが歌う「香港」に現れている。

珠江デルタへの進出と香港拠点のビジネス

中国の改革開放政策（１９７８年末）は香港企業の珠江デルタへの進出を促した。当社も広州市の国営時計会社に時計部品組立を委託したがこの委託契約はお互い初めて、成約まで私は何度も広州市に足を運んだ。往復の直通列車はいつも満員で車内には台湾の歌「酒干倘賣無」が流れていた。その後、当社は１９８８年江門市に独資企業を設立、順調に業容を拡大したが、これについては「ジェトロセンサー」１９９３年５月号の在外日系企業探訪に紹介された。

現在、多くの日系企業が中国に進出している。日本企業は「モノづくり」には優れた技術を持っているが「ヒトづくり」ではもう一歩と云う感じがする。「モノ」は見えるので訓練の成果を得られやすく、現地人は日本人指導員の技量を短期間で越える。一方「ヒト」は風俗習慣の差異など日本人には理解できないところが多い。企業の組織運営の現地化は早ければ早いほど、企業の成長に寄与すること大。香港人の起用は我々とは英語での意思疎通、国際ビジネスに通暁しているなどメリットが多く、香港を基点とした材料の調達、商品の販売など未だ優位な点が多い。

香港中文大学・マネジメントセミナーのエピソード

１９９３、９４年、香港中文大学では数度にわたり「マネジメントセミナー」を開設した。受講生は山東省の市人民政府上層部や国営企業の経営者など、講師は香港貿易発展局、ＩＣＡＣ（廉政公署）、金融機関などの職員、私は「生産管理」を担当、現地視察も含まれていた。このＩＣＡＣは公務員、民間人対象の「汚職防止組織」で、ＩＣＡＣ職員が来社した時の社員の緊張した態度から汚職防止への政庁の姿勢の厳しさを受け取り、水道管修理ワーカーは公務員なので茶菓の接待禁止と云われた。帰任は１９９５年、私はこの街で数多くのビジネス経験を積み活用した、潜在成長力でトップである香港を日本はもっと見習うべきであると感じている。

おわりに

昨年の日本香港協会主催「クリスマスパーティ・ラッキィドロー」で家内がキャセイ航空香港往復チケットを頂き２月に行って来ました。思い出深い香港で多くの老朋友と近況や昔話に花を咲かせました。誌面をお借りして関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。

香港いま・むかし

実地に学んだ国際コミュニケーション

日本香港協会会員（ローディア日華社長）木呂子 和宏、同（毎日新聞社エコノ

平野　今回は「香港リトルリーグ」(HKLL)の今と昔を紹介するため、70年代半ばの子供時代に香港に滞在し、プレーもした木呂子和宏さんと私、そして1999～06年に読売香港社社長として駐在、リトルリーグの「アジア太平洋大会」の取材もされた麻生雍一郎さんの3人で、話しをしたいと思います。

木呂子　私と平野さんは同じ学年で、リトルリーグでプレーをしたのは、メージャーリーグ(11～13歳)が1974～75年です。平野さんはそこで日本に帰りましたが、私はその後のシニア(14～16歳)にも進んで、77年までプレーしました。

平野　当時はイギリスの植民地でしたが、イギリス人は野球をしないので、香港チームといってもアメリカンスクールに通うアメリカ人と日本人学校の日本人の混成チームでしたね。基本的に土曜日が練習で、日曜日が試合でした。

左から平野純一さん、木呂子和宏さん、麻生雍一郎さん

木呂子　全体の7割はアメリカ人で、残りの3割が日本人という感じでしたね。１シーズン20試合で、秋口に始まって年末年始の休みをはさみ5月ごろに終了でした。６月にアニュアル・バンケットを行っていましたね。基本的にはアメリカ人の子供のための組織という感じでした。

平野　我々の時のグラウンドはスタンレーにありましたね。結構遠かった。

木呂子　行くのに1時間弱はかかったでしょう。バスも使ったけど、友達とタクシーに乗り合わせて行ったりして、かなり大変でした。スタンレーのグラウンドは、セント・ステファンズ・カレッジのもので、たまたまプレーをしている子供の親がそこの先生だった関係で使わせてもらっていました。

麻生　2000年代に入ってからは、03年までキングスジョージ５世学校のグラウンドを使いました。その後、ジュニアはライオンロック公園の球場で、マイナー(7～10歳)はホーマンティンで練習、試合をしています。04年には沙田の多石(トーシェック)という所に自前の球場(メジャー用)を作りました。また、今年のアニュアル・バンケットは5月22日に香港ディズニーランドホテルで開かれたそうです。香港ディズニーランドもかなり協力しているようです。

木呂子　専用球場とはすごいですね。我々の時はスタンレーが途中で使えなくなり、日本人学校の上のクリケットクラブのグラウンドを使ったり、アバディーンにあるグラウンドに変わったりと転々としました。

平野　当時のチーム数は、メジャーが６チームでしたね。

木呂子　下から順に、マイナー8チーム、メジャー6、シニア4、その上にビッグリーグというのがあって、そこが4チームありました。計22チームですね。

麻生　現在は27チームです。マイナー13、メジャー6、ジュニア8です。選手数は計350～400人で、ここ数年変わっていません。そのうち、日本企業がスポンサーのチームはマイナー3、メジャー3、ジュニア2の計8チームです。

　最近のメジャーでは、ＡＮＡメッツ、ＪＡＬロッキーズ、読売香港ジャイアンツの日本人中心の3チームが上位争いをしています。ＪＡＬは来期からはリコーに引き継がれるようです。

木呂子　増えていますね。ただ、アメリカ人主体の組織だったのは75年ごろまでで、その後は日本人がかなり多くなりました。日本人学校の生徒も、我々より下の学年からどんどん増えていったことも理由だと思います。

香港代表チームの遠征試合

平野　さて、レギュラーシーズンが終わると、選抜チームが編成されて、7月に「極東リーグ」の試合がありました。木呂子さんはうまかったから74年のマニラ大会、75年の台湾大会の2回に参加しましたね。私も75年は選ばれて台湾に行きました。

木呂子　行きましたねえ。極東リーグに参加していたのは、日本、韓国、台湾、フィリピン、グアム、そして香港の6カ国でした。台湾遠征の台湾戦では、香港は26対1で負けるような弱いチームでしたが、今考えればいい経験でしたね。

麻生　2000年代の前半は「アジア太平洋大会」になっていて、その6カ国にサイパン、インドネシアとタイが加わっています。

　私が香港を離れた06年以降の情勢をHKLLの田口治宏理事に聞きましたが、それによると、07年から日本は直接、米国大会へ行っており、09年からはアジア太平洋という地区も取り払われました。日本以外はクジでグループを２つに分け、決勝戦を行って勝った１チームのみが米国へ行くという方式です。今年の参加国は、香港、台湾、韓国、タイ、中国、グアム、サイパン、インドネシア、フィリピン、ニュージーランド、シンガポール、ベトナムの12カ国だそうです。

木呂子　参加国もだいぶ増えていますね。74年にマニラに行った時は、マラカニアン宮殿で当時のマルコス大統領に謁見しましたが、いい経験でした。75年の台湾では、蝶ネクタイの制服を着て、台湾のテレビにも出ましたよね。「It's a Small World」を、

（座談会 香港リトルリーグの移り変わり）

ミスト編集部次長）平野 純一、日本香港協会理事・広報副委員長　麻生 雍一郎

プレーをしていたころの木呂子さん（左）と平野さん

優勝プレートを受け取る麻生さん

１番から3番まで英語、日本語、広東語の歌詞を覚えて歌いました。

平野　ありましたね、テレビ出演。台湾はまだ発展途上国という感じで、最初は青少年センターのような所が宿泊場所だったのですが、ご飯が正直言ってあまりおいしくなかった。日本人はまだあの長粒米の中国料理に耐えられたと思うのですが、アメリカ人の子供は、これは無理と親に訴えたようで、途中からホテルに変わりました。

麻生　実力的には、最近の香港代表チームはかなり上がっています。08年には台湾に勝ち、あと一歩でアメリカ大会出場までこぎ着けたそうです。練習もかなりハードで、元プロ野球の選手やコーチに来港してもらう野球教室も年1回開いているそうです。

木呂子　それはすごいですね。我々のころはレベルの差がありすぎました。日本代表の調布リーグなどは練習を見ただけでも、すごいなーっと思っていましたからね。

平野　ちょっと実力が違いすぎましたね。遠征前には代表チームも毎日練習したのですが、日本、台湾、韓国には敵うはずもなく、なんとかグアムには勝ちたいという感じでした。

麻生　チームの活躍は香港ポストや読売新聞でも紹介されて、選手達の励みになっているようです。2006～08年のアジア太平洋大会は香港ディズニーランド特設会場で開催しています。3回連続で開くくらいですから、香港チームの意識も上がっているのでしょうね。

国際交流としてのリトルリーグ

平野　最近の香港リトルリーグは、かなり日本人中心の組織になっているようですね。

極東リーグ台湾大会の開会式（1975年）

麻生　ＡＮＡ、ＪＡＬ、読売など、どうしても強いチームが日本チームなので、そうなってしまうようですね。強いチームは監督、コーチも日本人ですし、代表チームの監督も、シーズンで優勝したチームの監督が務めるので日本人になっています。

木呂子　代表チームの監督がシーズンの優勝チームの監督というのは当時も同じです。我々の時代はアメリカ人でしたが。

平野　せっかく海外でプレーをするといういい機会なのだから、普段のチーム構成ももっとアメリカと日本が混じるようにした方がいいですよね。我々のころも、つたないながらも一応チームの作戦があって、多少は英語を理解する必要があった。私がいたカーディナルスは監督の奥さんが日本人で、わからなくなると「マミー」と監督が呼んで、通訳をしてもらっていました。あと、フライを捕る時、日本人は「オーライ」と言いますが、「I　got　it!」って言えって言われてね。

木呂子　平野さんのチームは、通訳をしてくれる人がいたからいいけど、私がいたスターズはそんな人もいなかったから、大変でしたよ。でも、普段からそういう訓練しておいたから、代表チームの米日混成状態でもなんとかやれたのでしょうね。まったくコミュニケーションできないんじゃ試合にならない。

昨年の香港リトルリーグ開幕式（写真：田口治宏さん提供）

麻生　お話しを聞いていると、昔のリトルリーグの方が、今考えればいい体験をされたという感じがしますね。まさに国際コミュニケーションです。それは、現在の仕事にも役に立つ面が多いのではないですか。

木呂子　確かにリトルリーグの体験は役に立っていますね。私は今フランス系の企業で働いていて、実は日本の企業で一度も働いたことがありません。言葉が通じない、何だか分からないところに放り込まれても、自力でなんとかしなければならないという環境は、リトルリーグの時も今も同じで、その意味で、非常に貴重な体験でした。

平野　私もいい体験だったと思います。香港代表といっても実態はアメリカ人と日本人。しかもイギリス植民地ですから、代表チームは試合前に英国国歌を歌うわけです。そして、日本人であるはずの私が、君が代を歌っている日本チームと戦う…。今振り返ると不思議な空間でしたね。

香港貿易発展局からのお知らせ

香港フォーラム参加のご案内

フェアウエルディナー会場（２００９年）

１２月１日(水)・２日(木)は香港へ！今年も例年通り２日間の会期で香港フォーラムが開催されます。１１回目の開催となる今回は、ドナルド・ツァン香港特別行政区政府行政長官やジョナサン・チョイ新華集団会長等の登壇が予定されるなど、例年以上に充実したプログラムになっております。また、香港や中国の政府・企業関連の最新情報が生で聞けるミーティングが多数用意されています。もちろん、毎年趣向を凝らしたフェアウエルディナーも健在。今年はヴィクトリアピークのレストラン「カフェ・デコ」を会場として予定しており、１００万ドルの夜景をバックに世界各地からの参加者との大交流イベントとなります。

フォーラム前日の１１月３０日(火)は日本香港協会の恒例イベントである、各地協会報告会と全国協会交流会も開催いたします。普段接点の無い国内の会員間同士でネットワーキングができる場所になっています。

また、毎年恒例のオプショナルトリップは、広西チワン族自治区が目的地となります。南寧・桂林の企業訪問のほか、桂林観光も含まれた充実の４日間（１１月２７日(土)－３０日(火)）となっています。今年は、香港フォーラムの開催前に予定されておりますのでご注意下さい。

昨年は日本香港協会からの参加者数が世界No.1となり、ビジネス・文化交流における日本と香港の役割がますます重要視されています。驚異的な成長を続ける中国の中でも最先進地域である華南地区を牽引する香港の活力に触れ、内部情報を掴むことができる香港フォーラムに是非ご参加ください。参加料は１人につき８００香港ドルとなっていますが、９月末までにお申込をいただいた方には３割引の特別料金が適用となります。

なお、全国連合会ではフェアウエルディナーで余興を披露していただける方を募集しております。世界各地の人間が見ている場所での余興披露は滅多に無い機会です。是非全国連合会事務局までご一報下さい。

ヘンリー・タン政務長官による講演（２００９年）

詳細は公式ホームページ　**http://www.hkfederation.org.hk/forum/forum2010/**　よりご覧いただけます。
お問い合わせは各協会または全国連合会事務局まで。

イノベーション・デザイン＆テクノロジー・エキスポのご紹介

市街地イベント（Detour）の様子

香港フォーラムと同時期の１２月２日(木)－４日(土)には、香港コンベンション＆エキシビション・センター（香港島ワンチャイ）に於いて、香港貿易発展局の主催の展示会「イノベーション・デザイン＆テクノロジー・エキスポ（IDTエキスポ）」と「世界中小企業エキスポ（SMEエキスポ）」が開催されます。

IDTエキスポでは、デザイン分野において本年度日本がアジア初のパートナー国に選出され、大々的に日本のデザインが展示されると同時に多くのイベントが催されます。展示では、経済産業省が旗を振る「感性価値創造フェアin香港」が日本の選りすぐりのデザイン商品を広くプロモートし、財団法人日本産業デザイン振興会が主催する「日本パビリオン」では香港を通じて海外にデザインビジネスを広げていこうとする多くの企業が自分たちの製品を展示します。他にもセミナーやレセプションなど様々な関連イベントが行なわれます。

また展示会期間を含む、１１月２９日(月)－１２月４日(土)の１週間は香港デザインセンター・香港貿易発展局主催のデザイン・オブ・デザイン・ウイークが開催されます。期間中はアジア・全世界のデザインハブとして機能する香港に、著名なデザイナーやビジネスリーダーが集結、フォーラムや教育プログラムを実施するとともに、香港各地で様々なデザイン関連のイベントが開催されます。

香港フォーラムと合わせて、同時開催のイベントにも是非ご参加ください。

日中港＜華人経営＞シンポジウムが開催されました

パネルディスカッション

６月２日（水）、ホテルオークラオーチャードルームにおいて『日中港＜華人経営＞シンポジウム－現実となった「中国の衝撃」』（主催：日本香港協会全国連合会、共催：香港貿易発展局）が開催されました。今回のシンポジウムでは、香港よりデビッド・ツエ教授（香港大学国際マーケティング学部長・商学院華人経営研究センター所長）の招聘が実現し、開催の運びとなりました。

当日は財前宏全国連合会会長の開会挨拶、渡辺和則二松学舎大学学長の基調講演をいただいた後、ツエ教授による『「グアンシ（関係）」の重要性－資本化の諸問題とマイナス面』の講演となりました。講演では、「グアンシ」の学術的説明から日本や欧米のビジネスとの対比を行ない、香港・中国のビジネスにおいて「グアンシ」は欠かせない要素である一方、使いすぎた場合には腐敗などの悪弊をもたらすものであること、またどのような状況下で「グアンシ」が力を持つのかなど、膨大な研究から細かく言及していただきました。

大盛況の会場

休憩後、『グアンシと中国ビジネス』のテーマにてパネルディスカッションを実施、ツエ教授に加えて、キニタ・ホン香港バプティスト大学コミュニケーション学部准教授、園田茂人東京大学大学院情報学環教授、古屋明伊藤忠中国総合研究所代表、青木俊一郎日中経済貿易センター理事長をパネリストに迎え、濱本良一讀賣新聞論説委員のモデレートで喧々諤々の議論となり、あっという間に所定の時間を経過して、まだまだ聞き足りなかった感がありました。

シンポジウムの最後に、古田茂美香港貿易発展局日本首席代表から、「グアンシ」も含めて体系的に学習ができる、チャイニーズ・マネージメント＆マーケティング・スクール（CMMS）の紹介があり、多くの方が最後まで熱心に聴講をされました。

デビッド・ツエ教授

渡辺学長による基調講演

全国連合会からのお知らせ

CMMS第７期修了式、第８期開講式

昨年９月より１０ヶ月間にわたって開催されました第７期チャイニーズ・マネージメント＆マーケティング・スクール（CMMS）が、６月１０日に修了式を執り行ないました。７名の修了者（７割以上の出席）と、うち３名の無欠席者の表彰が行なわれ、財前宏日本香港協会全国連合会会長より修了証と記念品が授与されました。終了後には懇親会を行ない、「華人経営」について熱い会話が飛び交いました。

財前会長より修了証と記念品を授与

修了式の余韻が冷めやらぬ中、６月１７日には第８期CMMSの開講式が行なわれました。８期からは会場を二松学舎大学（東京都千代田区）に移し講義設備の充実を図っております。８期では３５名もの受講申し込みをいただき広くなった教室も一杯になるほどCMMSへの期待が高まってきています。来年の３月までの１０ヶ月間に３０回の講義に加え、以前から要望のあった補講講義も行なうこととなりました。CMMSに関しては、全国連合会事務局までお問い合わせください。

満員の教室の中で
受講の意気込みを語る受講生たち

財前会長による開講の挨拶

横浜ドラゴンボートレース2010に参戦

第１7回を迎える今年の横浜ドラゴンボートレースは５月22日・23日（土日）と5月29日・30日（土日）の４日間にわたって開催され200を超えるチームが参加しました。

日本香港協会は5月30日の最終日、午後の「香港カップ」に「飛龍」「飲茶」「九龍」の３艇で出場、漕ぎ手、応援団併せて１００名を超える会員が山下公園に集結、香港伝統のドラゴンボートレースを堪能、初夏の海辺の午後を楽しみました。

今年の「香港カップ」優勝チームは7月末に香港で開催される本場のレースにご招待。

疾走する日本香港協会「飛龍」艇
（奥第3コース）

各チームとも健闘しましたが成績は「九龍」13位、「飛龍」１8位、「飲茶」２1位で、惜しくも香港行きを逃しました。　来年は優勝目指して頑張ります。

TOKYO

NPO法人日本香港協会

特定非営利活動法人日本香港協会　新理事長　原田光夫氏インタビュー

インタビュー・ペン　日本香港協会　全国連合会　室田　彩

原田新理事長（左）と著者

室田　この度はNPO法人日本香港協会(東京)新理事長へのご就任、誠におめでとうございます。中国本土、香港、台湾において起業経験があると伺っておりますが、どのような事業をされていたのですか？

原田　私は１３年間のサラリーマン生活の後、一種の脱サラで１９７６年にエレクトロニクス関連専門の会社を設立しました。３５歳でした。

米国MITで数学博士号を取得した有能な香港華僑と取引を始めましたが、私達はお互いにコンピュータ製造の知識が有り、その製造拠点としては台湾・新竹の科学技術公団の第一号契約者として登録し、Sigma-Delta社を設立しました。当時のコンピュータには日本の半導体、フロッピーディスク、その他大部分の主要部品が必要であった為、私はその全ての供給責任者として準備を進めていました。しかし香港のパートナーの急死によって、別の方法での検討を始めた時期に、現在でもその存在では１、２を争う規模に成長した初期段階のAcer社と　Mitac社が登場、そのMitac　Groupとの間でコンピュータ製造に着手しました。

以後１９７９年に台湾現地法人を設立して台湾コンピュータ組合にも加盟し主に商社活動を続けました。その後、並行して１９８３年に香港にも現地法人を設立し、香港／中国関係企業との仕事も徐々に拡張し、最終的には上海の浦東が全くの畑で有った場所に、複写機のリサイクル会社を設立しました。

また、香港株式市場に上場しているWKKグループの日本法人の代表取締役社長としても本年３月末迄約１５年間務め、華僑の中で多くの事柄を学びました。

室田　中国でビジネスをするのはとても大変だと思います。中国で事業に成功した秘訣、または中国進出を目指す方々にアドバイスを下さい。

原田　一言では何とも申し上げようが有りませんが「面子」「関係」「地縁」「血縁」等々が全てのベースと成る社会で育った彼等に取っては全くの異国人(日本人)が如何に溶け込んでゆけるのかを考える必要があり、「自分が日本人だ」という意識を持ち続けている間は、彼らとの距離は縮まらないと認識すべきでしょう。仲間同士、同郷者同士の中に如何にして仲間として迎え入れてもらえるのか―そこが商売以前の難問となるでしょう。商談をしている現場で「会社としての意見や回答を」即答出来ない相手に対しては、単なる使い走り程度の評価しか受けられないと自覚すべきです。自分の意見、見解、Yes/　Noは明確に表現する事が大切です。

室田　実は私も日本香港協会全国連合会の事務局員として4月に入社したばかりなのですが、協会が主催している広東語クラスを受講し、ドラゴンボートレースに参加するなど、イベントが盛り沢山で楽しんでいます。年内に予定されている行事はありますか？

原田　JHKSの活動の一環として香港ビジネス懇話会を原則隔月で開催して居ります。これは香港／中国においてビジネスを展開された経験者や、ビジネスで成功された人々、あるいは文化活動等、多方面での経験者を招きJHKS会員を中心にセミナー形式で開催致しております。

今年12月には第11回香港フォーラムが開催されます。世界中からフェデレーションのメンバーが集まり、各種テーマでのセミナー、活動報告、ビジネスマッチング等、様々な催しを行います。日本からも北海道から沖縄までの各支部から参加希望者を募り、香港で一堂に会してその年の活動報告・交流会を兼ねて開催します。

室田　全国連合会が主催し、NPO日本香港協会に共催していただいている「チャイニーズ・マネジメント＆マーケティング・スクール(以下CMMS)」についてですが、原田理事長は以前こちらの講師をされていたと伺っております。私もCMMSの事務業務を兼ねて、クラスに参加させていただいておりますが、大変興味深い内容ばかりですね。原田理事長から見て、CMMSを受講するメリットとは何ですか？

原田　学 校や書物で勉強しても、なかなか中国の歴史を認識し、奥の深い文化を勉強するのは一般的には大変困難を伴うと思います。日本には「中国」を専門に研究して居られる大学の教授陣が沢山いらっしゃいます。CMMSはそれぞれのご専門の研究分野を素人に解りやすく講義願い、少しでも「中国」にふれ、認識をして理解する為の勉強会です。

中国ビジネスに関わる会社や人々が　CMMSを受講して、一歩踏み込んだ「中国」を理解してそれぞれの分野で活動される一助になれば我々の開催意義があります。

理論編と実践編と各々１５講座を週一回程度で１０ヶ月間、勉強して戴けます。

室田　最後に、NPO日本香港協会の理事長として今後の目標をお聞かせ下さい。

原田　東京を始め日本全国の会員増強、香港と日本の相互理解と経済活動、文化活動を中心にした両国間の橋渡しが継続的に出来る様に活動して参りたいと存じます。

NPO新理事長　原田光夫氏

関西日本香港協会　事務局

華人経済経営研究部主催セミナー

関西日本香港協会では華人経済経営研究部主催の「チャイニーズ・マネージメント・アンド・マーケティングスクール」(CMMS)を過去6年間(2003年～2008年)実施し、中国ビジネスを目指す250名に毎年30講座を実施する成果を挙げました。昨年度スタートの第7期CMMSからは全国連合会が東京でCMMSを主催することとなり、当協会では本年度より華人経営研究部を華人経済経営研究部に名称を変更し、斎藤治理事(華人経済経営研究部長)と馬場正修理事(華人経済経営研究部主任研究員)が華人社会の経済・経営の研究とセミナーを企画することとなりました。大勢の参加者を募集する大規模セミナーは香港貿易発展局と共同で主催し、社会に対する情報発信力を強化する方針で臨んでおります。今年に入って実施したセミナーは下記のとおりです。

1) 香港を巡る国際税務セミナー(共同主催)
「香港活用策とキャッシュ・フロー戦略～近年の税制改正を受けて～
日時:3月29日(月)13:30－15:30
場所:大阪国際ビルディング17会議室
講師:㈱コーポレート・マネジメント・コンサルティング　代表取締役　伴仁氏
参加者:65名
内容:本年度の税制改正でタックス・ヘイブン税制の改正(統括会社税制の導入等)が予定されており、日本の税制改正の要点と香港の税制の概要を解説して頂き、香港の活用策やキャッシュ・フロー戦略を、実例を交えて話して頂きました。

2) 香港・中国ビジネスセミナー(共同主催)
「中国経済の現状と課題」
日時:4月20日(火)13:30－16:00
場所:大阪商工会議所　地下１階１号会議室
講師:野村資本市場研究所　シニアフェロー
関　志雄氏
参加者:250名
内容:米国に取って代わり日本の最大の輸出相手国となった中国経済の現状と課題を豊富な統計資料と分析データに基づいて解説され、今後中国とどのように向き合う、日本経済活性化への提言も含めて話してもらいました。

3) 中国兵法講座:
ビジネスに生かす「孫子・三十六計」連続講座(有料)
期間:5月～7月　19:00～21:00
場所:香港貿易発展局大阪事務所　セミナー室
講師:大阪大学文学研究科中国哲学研究室
教授　湯浅邦弘氏、神陽貿易㈱総経理　北基行氏、㈱貿易人　代表取締役　馬場正修氏
受講者:9名
内容:中国兵法の基本テキスト「孫子」と中国社会で民間伝承されてきた「計略」の書「三十六計」を学び、ビジネスの実践に役立ててもらうことを目的とした講座です。

文化部講演会

「大阪のまちづくり」を考えるシリーズで講演する
赤井　伸朗　大阪大学大学院　准教授

関西日本香港協会の文化部では「大阪のまちづくり」をテーマにして連続講座を実施しております。

1)「大阪のまちづくり」を考えるシリーズその①
「第二都市戦略～創造都市モントリオールを事例に～」
日時:5月19日(水)18:00-19:30
場所:香港貿易発展局大阪事務所　セミナー室
講師:㈱グローバルミックス　代表取締役　勝見博光氏(都市再生・文化事業等に関するコンサルティング事業で活躍中)
参加者:15名
内容:日本でも公演した世界一のサーカス団「シルク・ドゥ・ソレイユ」の成功により芸術都市を創造したカナダのモントリオール市の事例を紹介し、地域の伝統的文化や庶民感覚・生活様式を重視した町づくりが有効であると示唆されました。

2)「大阪のまちづくり」を考えるシリーズ～その②～」
「香港国際空港の経営戦略にみる関西3空港問題への示唆」
日時:6月17日(木)18:00-19:30
場所:香港貿易発展局大阪事務所　セミナー室
講師:大阪大学大学院国際公共政策研究科
准教授　赤井　伸朗氏(大阪府知事の外部ブレーンの一人で、財務省財政制度等審議会専門委員、行政刷新会議事業仕訳委員で活躍中)
参加者:31名
内容:最近香港を視察され、新たにランタオ島に開設した香港国際空港がアジアのハブ空港として成功している事例を紹介し、交通インフラの整備と収益性を重視した効率的な空港ガバナンスの重要性を示唆されました。

CHUKYO

中京日本香港協会

２０１０年イベント紹介あれこれ

中京日本香港協会　副会長・事務局長　佐藤 亮一

会員懇親会（６月１３日）伊勢湾クルーズランチバイキングにて記念撮影

本年5月14日(金)名古屋マリオットホテル会場において８０名の聴講者参加によりビジネスセミナー「珠江デルタ地区の将来性とマーケット及び香港ビジネスメリット」及び、中国市場マーケットについて４時間近く講演があった。講師である香港貿易発展局日本首席代表の古田茂美氏の話術もあり、参加者はメモをしたり資料に目を熱心に通したりして聴き入るなど熱気が感じられた。

次にビジネスセミナーとは別に、本年後半の名古屋近辺を中心にした行事を紹介したい。ひとつは国連が定めた「国際生物多様性年」であり、第一回ブラジル、リオ・デ・ジャネイロを第１回ＣＯＰ１(Conference of the Parties)として２年に１回開催されてきた。

２００５年愛知万博に継ぐ大型国際イベントとして、第９回ドイツ、ボン市に引き継ぎ第１０回ＣＯＰ１０が本年１０月世界１３１か国から８０００人の来名が予想され、地球規模の会議が始まる。中京日本香港協会にもパンフレットにて宣伝協力の要望が名古屋市国際交流課・県国際交流協会からあがっている。

ふたつ目は県内の大きな行事「あいちトリエンナーレ２０１０」であり、都市の祝祭として、２０１０．８．２１～１０．３１に美術・芸術の世界発信を名古屋からと各中心地で開催される。

会員懇談会の話題としては２００７～２００９年中京日本香港協会夏季リクリエーションとして、飛騨高山(七福神一刀彫)長良川鵜飼見物、名古屋港水族館(特別室)と名古屋近郊での日帰り親睦会を実施してきた。今回は伊勢湾ランチバイキングクルーズを企画。海上より中部国際空港、常滑焼き陶器の煙突群または新日鉄の工場風景など、日頃目にしていても気付かない船の上からの景色を一服の清涼感として味わってもらう目的で実施した。今後は、留学生(香港・中国)の浴衣着付け文化の紹介や、名古屋名物食事会などの情報発信をしていきたい。秋口には、香港貿易発展局、名古屋市国際交流課の協力を得て中国市場マーケットセミナーを実施予定している。

会員親睦会として先ほど述べた５年目を迎える「夏の涼味体験」に触れてみたい。毎年６月から７月にかけ、現会員の暑気払いとして過去４年飛龍誌面でも一部紹介したが、第１回名古屋港水族館以下、花火・山車祭り(犬山)、鵜飼(長良川)、高山七福神(奥飛騨)を催し、会員間また、香港・中国の方々にも大変興味を持たれた行事が続いた。今回、６月１３日(日)に名古屋伊勢湾クルージング(船上より中部新空港よりの離発着見学)また、バイキングの食事、マジックアワー及び抽選会など家族共々、楽しい一日を過ごしてもらうべく企画したところ、５７名もの参加を得、盛大に開催できたことは、関係理事、名港海運㈱の配慮に深く感謝申し上げたい。降船時に「次回はどこですか？また、連絡下さい」との声があがった。事務局としては、今後も皆様に喜ばれる企画を提案・実施して行きたい。

最後に、１０月２３日から２４日に恒例のワールドコラボフェスタが愛知県国際交流協会、なごや国際交流団体協議会、ＪＩＣＡ、ＮＧＯセンターの主催、後援で上記ＣＯＰ１０、トリエンナーレと並行して名古屋市内中心地で開催されます。出展が３回目である今年のテーマが「Connecting to the Future globally」(つなげよう未来へ　わたしたちのま～るい地球)ワールドコラボフェスタ２０１０。当中京日本香港協会も市内４大学、香港・中国の留学生に働きかけ、会場にて国際交流の一環を担うべく、出展参加して行く予定である。

飛龍　No.65　2010年8月 発行
(禁無断転載)

日本香港協会 全国連合会

〒102-0083　東京都千代田区麹町3-4　トラスティ麹町ビル6階
香港貿易発展局 東京事務所内
電話(03)5210-5901　FAX(03)5210-5860

ＮＰＯ法人日本香港協会(東京)
〒102-0083　千代田区麹町3-4　トラスティ麹町ビル6階
香港貿易発展局内　電話(03)5210-5870

関西日本香港協会
〒541-0052　大阪市中央区安土町2-3-13　大阪国際ビルディング10階
香港貿易発展局内　電話(06)4705-7030

中京日本香港協会
〒541-0052　大阪市中央区安土町2-3-13　大阪国際ビルディング10階
香港貿易発展局内　電話(06)4705-7030

九州日本香港協会
〒812-8566　福岡市博多区博多駅前3-25-21
九州旅客鉄道(株)内　電話(092)474-0747

山形日本香港協会
〒990-2432　山形市荒楯町1-14-21
(株)日本不動産コンサルティング内　電話(023)633-2110

北海道日本香港協会
〒060-8661　札幌市中央区大通西3-11
北洋銀行国際部内　電話(011)261-4288

宮城日本香港協会
〒980-0811　仙台市青葉区一番町3-7-23　明治安田生命仙台一番町ビル3階
(株)ＪＴＢ東北 交流文化事業部内　電話(022)212-5552

沖縄日本香港協会
〒900-0033　那覇市久米2-2-10
那覇商工会議所内　電話(098)868-3758

ＵＲＬ　http://www.jhks.gr.jp

平成22年度第１回通常総会・講演会開催

九州日本香港協会　事務局

昨年７月に九州日本香港協会が発足し、会員の皆様のご協力を得ながら活動をして参りましたが、この度初めてとなる通常総会･講演会を去る６月１５日(火)ホテル日航福岡にて開催しました。

まず、石原会長より、開会前に会場で放映していた孫文のビデオに触れ、孫文を陰で支えた日本人がいたという興味深い事実に加え、その日本人の中には九州出身の梅屋庄吉(長崎)、宮崎滔天(熊本)など、孫文にとって香港･九州はとてもゆかりのある地であるということ、来年は辛亥革命100周年となる記念の年であるということが紹介されました。

また、香港はアメリカの政策研究機関(ヘリテージ財団)とウォールストリート･ジャーナルによる「経済自由度ランキング」で世界第１位となり、1995年以降16年連続で首位を維持していることは、香港がビジネスを行う上で非常に魅力的であることを示していると述べられました。

石原会長

来賓としてご出席いただいた香港貿易発展局大阪事務所次長　田中洋三様からは、以前は福岡日本香港協会と北九州日本香港協会がそれぞれ活動していたが、九州日本香港協会が発足したことで活動エリアが九州全体に広がることとなり、大変心強く思っていること、また来年３月には九州新幹線が全線開業するとのことであり、そうしたことも追い風にして九州日本香港協会が今後ますます発展されることと期待しており、今後も香港貿易発展局の活動に理解、協力をいただきたいとのご挨拶がありました。

講演会では、北九州市立大学大学院　マネジメント研究科教授　王　効平氏をお招きし、「華人系資本のビジネスネットワーク」というテーマにて貴重なご講演をいただきました。「華人型経営」と呼ばれる経営の大きな特徴の１つとして、「縁戚重視」のビジネスネットワークを構築し、それを活用していくということがあり、縁戚の中でも特に重要とされるいわゆる「三縁」ネットワーク(血縁、地縁、業縁)について、王先生が現地で関係者等にヒアリング調査された実態の一端についてお話しいただきました。こうしたネットワークの大きな機能として、相互信頼関係の上に成り立つ信用保証機能、取引の柔軟性と拡張性の促進、取引コストの削減等の効果があることを紹介され、また華人系資本がネットワークを重視する背景には、移民として活動する中で自分たちのアイデンティティを確立していったことや、異国にあっても自分たちの伝統的な価値観を維持する努力(家庭内での子弟教育や中国語による教育機会の確保)を続けていったこと、それから多数派を占める現地人との関係による政治的要因などがあると分析されました。華人系資本の世界経済におけるプレゼンスが高まってきている現状において、王先生の講演内容は非常に興味深く、大変参考になるものでした。

王効平氏

講演会終了後に行われた総会では、下記の議案について審議が行われ、満場一致にて可決承認されました。

議　事
第１号議案　平成２１年度事業報告および収支決算について
第２号議案　平成２２年度事業計画および収支予算について
第３号議案　会則の変更について
その他　会員の入退会報告

今後も、当協会ではより活発に活動を行う為、個人･法人の会員拡大にむけた取り組みを実施、また全国の会員の皆様に資するため、会員特典の拡大に取り組んでいきたいと存じます。会員の皆様、ならびに関係機関のご協力をいただきながら、更なる活動の充実を図って参りたいと思いますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

会場の様子

YAMAGATA

山形日本香港協会

『日本企業と中国企業で働いて思ったこと』

山形日本香港協会会員　陳　理

さくらんぼ狩りを楽しむ陳氏

１９８０年代改革開放路線が確立されたばかりの頃、鄧小平同志が日本各地を視察された時、その案内役として松下電器の創業者松下幸之助さんが鄧小平同志と一緒に新幹線に乗り、富士山の麓の鉄橋を通過しようという映像がテレビに映し出され、それが私の頭に印象深く残りました。当時は数少なかったのですが、幼少のときから日本に興味を覚え、外国語大学で日本語を専攻しておりました。私が大学を出て中国の旅行社の初仕事で知り合ったのがきっかけで平成元年に大山照明株式会社（現在オーデリック株式会社）に入社しました。それから、理想（ｼﾞｬﾊﾟﾝ　ﾄﾞﾘｰﾑ）を求めて海を渡り二十年の歳月が経ちました。当初運命の巡り合いで日本の会社に入社できて本当に幸運と思いました。

しかしながら、勝手が違う日本での生活と仕事ぶりは慣れるまで大変でした。会社の営業所に配属され、まず、お得意先の電話での注文の業務受付を担当しました。たどたどしい日本語での回答はお客様から怒鳴られたり、叱られたりで生きた心地がしなかったことを覚えております。その数年後、中国室に配属され、未開拓の地、中国の物件を関係者と一緒に積極的に受注活動を展開しました。

理解力のある幹部と上司に恵まれ、中国東北市場の仕事を私に任せて本当に信頼してくれました。大連の通信ビルのライトアップの受注をはじめ、大連文化クラブ（市民会館）、大連金元ホテル照明システムの受注を成功に収めました。その他、上海タワー・北京国際空港ビル・人民大会堂改修の照明器具の受注にも成功し、当時は日中間の橋渡しを十分したつもりです。

しかし、２００３年に、いろんな問題が重なり中国ビジネスを会社が断念してしまい、会社を離れざるを得ませんでした。

その間、日本企業でいろんなこと、いろんな人と出会いましたが、一番心に感銘を受けましたことは私の成長を見守ってくれた日本人の先輩の方々です。私の上司であった世利康則氏や、入社以来付き合いのある大山先輩とは会社を離れても現在までその絆を深めております。仕事上のアドバイスは勿論のこと、日本での生活のことでも面倒を見てくれました。チームや和を大事にするのが日本企業の最大の特徴かと思っております。

中国に帰国し、現在の中国郵政省の所管の企業で、中国郵政航空に再就職して３年になりました。この企業は中国国営企業なので、中国企業の体制を色濃く残しております。日本語の『親方日の丸』、中国語で『鉄飯碗』の典型企業です。今の時代から見れば確かに表は国営企業も変化しましたが、実際は、表の繁盛の下にいろんな問題点があります。所謂国家公務員の集団です。国民へ奉仕すべきであるが、実際は官僚集団利益のため、或いはある官僚の出世の為に行政が動いています。これは私がこの三年間でなかなか理解できないことです。

ところで、中国政府は昨年から観光産業を基幹産業と位置づけ、現在ＧＤＰ４％から２０２０年にはＧＤＰ１０％まで引き上げることが了承されております。海外社員研修・株主総会海外会場・見聞広め目的での社用団体海外旅行は間違いなく倍倍のペースで膨れていくでしょう。中国人の来日目的１位はショッピング、２位は温泉（ブーム中）、３位は歴史建造物見学、４位は自然を楽しむ、　５位は日本食となっております。私は東京に居ながら山形支部の会員になっているのですが、２位から５位までの目的を十二分に持ちえた地域です。まさに中国の歌にある『小城故事』のごとき、友を連れて一杯やりたくなるような郷愁のあるところです。

これから中国人観光客は大いに山形に注目し、大勢押し寄せたときに各旅館、ホテルが困らないようなシステムを今から準備することが大事と思われます。旅館に中国人の若いコンシェルジュが必須になるのではと思うこの頃です。

陳氏の勤務先の中国郵政航空の会社機

～日本のデザイン産業を香港・中国ビジネスへ～

「デザイン産業セミナー in 札幌」を開催しました

北海道日本香港協会 事務局

「クール・ジャパン(Cool Japan)」という言葉に代表されるように、日本のデザインが世界の注目を集めています。香港はデザイン産業の一大集積地であり、日本企業にとってのビジネスチャンスが広がっていることを受け、香港でのデザイン関連ビジネスに関心のある企業の皆様にご参加頂き、6月9日(水)北海道立道民活動センターかでる２・７で、香港貿易発展局主催、財団法人日本産業デザイン振興会共催、経済産業省北海道経済産業局、北海道、札幌市、札幌商工会議所、JETRO、北海道日本香港協会、北洋銀行後援による「デザイン産業セミナーin札幌」を開催いたしました。

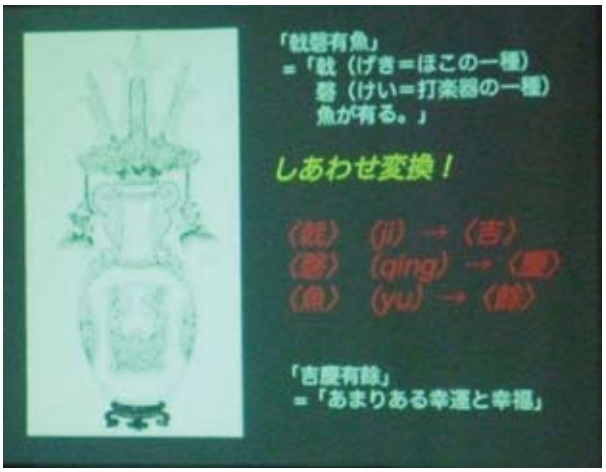
講演を行う香港貿易発展局　伊東マーケティング・マネージャー

講演1　「香港・珠江デルタ地区の経済発展と日本企業のビジネスチャンス」

最初に、香港貿易発展局伊東マーケティング・マネージャーより、「香港は先進国水準の商習慣・生活レベルと知財保護を持っており、日本企業にとってのビジネスチャンスは大きい。加えて、2009年1月に中国国務院の国家発展・改革委員会による「珠江デルタ改革発展計画要綱」が策定されたことから、中国大陸やアジアへのゲートウェーとしての機能が今後ますます重要となってくる。」と、香港経済の現状を詳細にご説明いただきました。

講演2
「中国のおしゃべり図像-温故知新のデザイン戦略」

続いて、北海道大学文化研究科中国文学講座教授武田雅哉氏より、「めでたい図像は何故めでたいのか」をテーマにご講義いただきました。中国の伝統的吉祥図案を例に、西洋では不吉とされる蝙蝠(こうもり)が中国では代表的な吉祥文様であること、日本ではおめでたいイメージの強い「亀」はマイナスイメージが強いことなどの説明に、参加者は興味深く聞き入っていました。



「しあわせ変換！」でこの図柄が何故めでたいのかを解説

講演3「デザインビジネス成功に結びつける進出支援プログラム紹介　香港貿易発展局"IDTエキスポ"展示会のメリットと活用できるサービス」

講演の締めくくりに、(財)日本デザイン振興会川口事業部主任、香港貿易発展局吉村アシスタント・マーケティング・マネージャーより、本年12月に香港で行われる「Inno Design Techエキスポ」(IDTエキスポ)の概要ならびに出展を希望するデザイナーおよびデザイン事業者に対し、半年間に渡り1to1でのコンサルティング、香港・中国の優良企業とのビジネスマッチング、商談設定などを支援する「特別支援サービス」を提供するプログラムについて説明を行いました。

熱心に聴き入る参加企業のみなさま

セミナー終了後には早速、参加希望企業からの個別相談申し込みがあるなど、多くの北海道企業が香港への興味関心、進出を検討していることが強く感じられました。

北海道日本香港協会では、今後も香港関連の情報提供、ビジネスサポートを関係機関と連携しながら行っていく予定です。

MIYAGI

宮城日本香港協会

宮城日本香港協会 事務局　武田　功

2010年度通常総会、記念セミナー、そして懇親会を開催しました

５月１１日(火)ホテル仙台プラザにおきまして、２０１０年度通常総会を開催致しました。来賓として日本香港協会全国連合会管理部長の伊東正裕氏ご出席のもと、知事の代理として宮城県経済商工観光部次長の吉田裕幸氏、市長代理として仙台市経済局観光部参事兼国際プロモーション課長の峯岸浩友氏にご出席いただき、６２名(委任状出席を含む)の出席を得て盛大に行われました。

続く記念セミナーにおきましては、香港の食文化に詳しいＮＴトレーディング代表で香港貿易発展局の貿易アドバイザーの谷信雄氏による「中華圏における日本食品販売事例」と題した講演がありました。「１.国際物流都市香港の魅力、２.香港マーケットの魅力、３.高まる日本食ブーム、４.輸出の仕組みとその流れ」の４点について丁寧に教えて頂きました。谷氏は力説しています。「沖縄の半分の土地にその５倍に当たる７００万人の人口がある、その半分は３万ＵＳ＄以上の所得を持っており、生活レベルが高い、長寿国であり、世界レベルの健康志向を持っており、日本食への関心が高い、そして香港は世界の食卓とも呼ばれており１万軒以上のレストランがあって、外食産業が盛んである」と。

谷信雄氏による講演風景

次に演壇に立った香港宮城県人会会長の鈴木英一氏は、自分の生い立ちに言及、仙台三高で学んだ思い出や、山一証券に勤めて香港勤務を命ぜられ金融を通して香港との関係ができあがった経緯など、短時間ではありましたが、おもしろく語って頂きました。

そして、１５階「メープル」に場所変えての懇親会では、香港貿易発展局東京事務所長のサミュエル・チェン氏にお祝いの言葉を頂き、セミナー講師の谷氏や鈴木氏を交えて懇談、途中仙台空港ビル(株)の柿崎社長のスピーチや女性ダンスグループによるヒップホップ・ダンスパフォーマンスもあり、参加した会員の皆様も楽しく懇談されておりました。

懇親会で挨拶するサミュエル・チェン氏

春の「お花見会」を開催しました

今年は例年と異なり異常気象、寒い日が続きました。絶好の花見日和と思って計画した４月１７日(土)、４０年ぶりの雪となってしまい、やむなく山田市民センター和室においての「雪見酒」となってしまいました。でも、家族で参加した人、友達連れで参加した人、会社の同僚と参加した人、そして地元だけでなく古川から駆けつけてきてくれた人など、５０名を超える人々の参加を得て、おいしい弁当を食べながらの和気藹々のお花見会となりました。

和やかな雰囲気で、雪も吹っ飛びそうですね

「デザイン産業セミナーin仙台」を後援しました

６月８日(火)エル・ソーラ仙台大研修室において、香港貿易発展局主催の「デザイン産業セミナーin仙台」が開催されました。東北経済産業局佐藤産業部長の開会の挨拶、香港貿易発展局の伊東次長による香港の紹介のあと、日本デザイン産業の成功事例として(株)アートクラフトインターナショナルの代表取締役・木村浩一郎氏による「海外へ展開する日本のデザイン」と題する講演がありました。木村氏曰く「フランスの会社は日本に来て日本の新しいもの、新しいデザインをほしがる、しかもフランスで日常的に使うものをほしがる、日本に来たからと言って日本古来のものをほしがるわけではない」と。日本のデザイン産業の将来が、香港市場を通して見えてくるような気がします。

熱心に筆をとる参加者

沖縄日本香港協会　事務局

オリオンビールが香港へ本格輸出

沖縄のビール会社であるオリオンビール㈱(嘉手苅義男　代表取締役社長)が、香港へ本格的な輸出をすることとなった。オリオンビール㈱外販部外販課長の大久保竜也氏を訪問し、インタビューを行った。大久保氏は、本格的な輸出に先立ち、沖縄県が実施した沖縄県産品海外販路拡大ネットワーク事業の中の人材育成事業を活用して、香港に駐在しながらマーケットリサーチ・販路の確保等を行った。

大久保氏によると、オリオンビールは、香港・シンガポールなどのアジアで、日本・沖縄料理レストランを展開する「えんグループ」の関連会社・沖縄セントラル貿易を通して輸出する。香港では、えんグループのレストランで「生ビール」として販売される他、他の日本食レストランへも展開を進める。「今までも香港に缶ビールを出していたが、今回は樽(バレル)を輸出するので、香港でも鮮度が重視される樽生ビールを提供できるようになる。」と語った。今回の「樽生」の輸出は香港との海上輸送を担っているマリアナエクスプレス・ラインズが、沖縄～上海～香港の経路を見直し、那覇～香港を直行便で結ぶことになり、輸送時間が２週間から２日に短縮することから実現できた。沖縄の飲料や食材が香港を通して中国・アジアに広がることが期待される。

香港に行った際は、「沖縄のビール」も是非ご賞味ください。

香港ジャスコでのオリオンビールのプロモーション

那覇ハーリー　香港ドラゴンボートレースに参加

２０１０年７月２３日から２５日の日程で開催される「香港ドラゴンボートレース」に那覇ハーリーからの選抜チームである「琉球那覇ドラゴン」が横濱ドラゴンボートの優勝チームと共に参加することとなった。

「爬竜舟・ハーリー」は「竜」を描いた舟を「爪」でかき、走らすという意味。

毎年５月に開催される沖縄ハーリー

竜の「爪」にあたるのは、サバニ(舟)を漕ぐ櫂。呼吸の合った櫂の動きと水しぶきは、見ているだけで楽しい。

沖縄のハーリーは中国福建省や広東省など東シナ海沿岸で「端午の節句」に行われる「龍舟節」と同じ起源の行事といわれている。長崎でおこなわれるペーロンも起源は同じということだ。

ドラゴンボートレースの「聖地・香港」での各国のチームと沖縄のチームの熱き戦いが期待される。

サーカー氏　香港パワーリフティング大会で優勝！

香港ウェイトリフティング大会で優勝したサーカー氏

沖縄日本香港協会・会員のサーカー・スニエルラジャン氏が、２０１０年４月３日　香港で開催された「香港パワーリフティング・チャンピオンシップ２０１０」に出場し、男子７５キロ級マスターズ３(６０歳代)で優勝した。

サーカー氏は「香港はイギリスの影響もあり、パワーリフティングが比較的盛ん。故郷の香港で優勝できてうれしい。」と語り「今後も練習を重ねて良い成績を目指したい。」と意欲を見せた。沖縄と香港のスポーツ交流が益々盛んになることが期待される。

港を望むお部屋で 横浜ならではの
寛ぎのひとときをお過ごしください。

ヨコハマ グランド インターコンチネンタル ホテルは、ヨットの帆をイメージした外観がみなとみらいのシンボルとして親しまれている、横浜港に一番近いアーバンリゾートホテルです。
ビジネスセンターやフィットネスクラブ、スパだけでなく、個性豊かなシェフによる本場の味を楽しめるレストランも充実。
青い海に包まれる落ち着いた空間で、それぞれの時間をお過ごしください。
羽田空港・成田空港よりリムジンバスが運行（羽田空港より約 20 分、成田空港より約 90 分）。また、ホテルから各所へのアクセスも大変よく、横浜市内の観光名所はもちろん、都内ショッピングエリアや古都鎌倉へのお出かけにも最適です。ビジネスやご家族での旅行など、大切なシーンでのご滞在に是非ご利用くださいませ。

Do you live an InterContinental life?

PRIORITYCLUB® REWARDS
Earn points or miles.

詳しくは、045-223-2222（代表）までお電話いただくか、
www.interconti.co.jp/yokohama をご覧ください。

INTERCONTINENTAL®
YOKOHAMA GRAND